



ひっぴたより

No.12 2020.2.28

まだ朝夕は冷え込みますが、おひさまの光が強くなってきましたね。森も子どもたちも、春に向かって開かれていくように感じます。

森のようちえんと普通の幼稚園と、どこが違うの？ 森で育った子どもたちはどんな子どもたち？ そんな素朴な疑問を抱き、「森」に惹かれ、ひっぴに仲間入りさせてもらって、早1年半。この1年を通して、私が今感じている、森がもつ力と子どもたちの中に育まれるものについて、「森の精」の力をかりて、書いてみようと思います。

…ここは冬木立ちのひっぴの森… そこここで自由に遊ぶ子どもたちの楽しそうな声、小鳥のさえずり、空をゆったりと流れる雲を感じていると、じんわりと穏やかに満たされていきます…

一人うつむいて笹やぶの中を歩いているAくん、少し元気がなさそう…何か気持ちが落ち込むことがあったのかな？ 仲間に入れなかったのかな？ そんな「大丈夫」森の精のお母さんが静かに寄り添います。「ほう、アてごらん…どの木も草も、きのこも虫たちも、どれ一つとして同じものはないのよ。みんな違う、そしてそれぞれに支え合っている」Aくんは地面を見つめて立ち止まりました。「とげのある野ばらも、毒のあるウルシも、みんなそこにある理由がある。それぞれみんな違うから、豊かな森ができるのよ。あなたにはあなたでいいのよ。」優しく微笑みかける母なる大地の精です。

日の光に温められてゆるんだ土の上、無心で土をこねくりまわすBちゃん。隣のCちゃんは土と水をボールに入れて、ちよどよい国を追求中。大きな泥の塊作りに夢中なCくん。子どもたちがそれぞれの遊びに興じている様子を、木の上から眺めているのは、森の精の子どもたち。「こうじゃなきゃ、こうあるべきっていうのはないよ。ほう、何でも作れるし、どこにどこも行ける、何にだってなれるさ！ きみは何をしたい？」キラキラ輝く瞳で、にっこりと語りかけます。

「あ、おじいちゃん！」森の精の子の目の先、ひげの長い老人が切株に腰掛けています。老人の前でEくんが切株に生えたきのこをじっと見ている。「どうしてここにはえたのかな…」老人は目を細くして「えりじの、どうしてここにきのこがあるのか…命は皆巡っている。おわりははじまりで、はじまりはおわり。倒れた木々からは新しい命が生まれ、たくさんの命をつないでいく。ほう、君の足下にも無数の命がうごめいている」と。宙を見つめ、難しい顔のFくん「大人になりたいよ。死にたくない…」老人はそっとFくんの肩に手をまわし、語りかけます。「ほうごらん、目の前の森を。何も恐れることはないんだよ。命は続いていくのだから。今はまだわからなくても、君は命の循環の中にいる」森の精のおじいさんは、その深い眼差しでそっとFくんの瞳を見つめます。


ふいに空のおひさまが雲に隠れ、冷たい風が吹き始めました。しんと冷える森の空気に、子どもたちの顔がこわばります。「手が冷たい、いたい」涙をこぼし、赤くなった両手を差し出す白ちゃん。焚き火にかざして、一生懸命に手を温めます。Hくんは手がかじかんで、思うように服が着られません。焚火のまわりで温まる子どもたちを、白い息をいっぱい吐きながら「あつ！」と走っていく子どもたちもいます。その様子を腕組みして見ている大きな森の精は、冬のお父さんです。冬のお父さんは寒さをもたらし、大地を凍らせ、空気を凍らせ、子どもたちの手足にも冷たい息をふきかけます。だけにお父さんは知っているのです。寒さを乗り越える度、子どもたちがひとつ大きくなることを。どうしたらよいか考え動いて、自分の力で寒さを生き抜き、自信をつけていくことを。厳しいお父さん、その瞳は優しく温かいです。

森に生きる無数の命とともに、子どもたちは日々を過ごしています。子どもたちはきっと、森が言葉なく語っているいろいろなことを、無意識に感じていると思います。まわりの友達や自然をありのまま受け入れ、巡る季節の中で成長していく子どもたち。大地の優しさや安心感の中で、バのまに、全身も五感をフル稼働させて、夢中で遊ぶ日々。冬の寒さや冷たい雨に、自然や生きるこへの厳しさを体感し、それを糧にして、また新しい春を迎えます。

大きな命の営みの中にあることを、幼い体に刻み込んだ年月は、きっとこの世界で生きていくゆるぎない土台となることでしょう。

春を目前に、ひとまわり大きくなった子どもたち。その子どもたちの瞳の奥に、森の精の眼差しがちらついているように感じます。

水野さと子

自然とともだち ~2月 春までみんなで暮らそう! カラ雜の鳥群~ 

2月は「立春」を迎え、暦の上では春になる季節ですね。そして12月の「冬至」の頃と比べると日がずいぶん長くなり、「光の春」という言葉のように光が真冬より強くなってきました。

その光に応じて、小鳥たちの声がだいぶ賑やかになってきました。ぴりぴりの方では子どもたちが、鳥のエサ台をつくりまわし、冬の森は春〜秋と比べて鳥にもエサを見つけるのが難しく、また木々の葉が落ちてしまっているので、バードウォッチングにはよい季節ですが、鳥からしてみれば、天敵にもみつけられやすく、生きのびにくいのです。そんな冬は春〜秋と違って「群れ」によって過ごします。「群れ」なることで天敵から身を守り、エサも協力? (実際には誰かが見つけたところへ人がわーと群がる) してつけやすくなるのです。「群れ」というと動物初めと人間で集まっているのが普通ですが、鳥の世界は「混群」という敬禮の違った小鳥たちが群れをつくることがあります。

その群れにありと、10羽〜30羽ほどの鳥に囲まれることになり、次から次へと違う鳥がみられ、とても賑やかで、鳥たちは歓迎されているようで、おもしろいことに、[いろいろな群れのトップバッターはエナガさんたちで「チュリリ.. ツェル.. チェリリリ..」とかわいく鳴いて飛びさると思うと、シジュウカラ、コガラ、ヤマガラ.. などが続き、最後に小さなキツツキ、コゲラが「ギ〜」と鳴いて群れへ去っていきます。そのあとは音静かな静かな森、風の音が聞こえるばかり...

しかし、やはり暖冬の影響か、最近彼らたち、群れになっていません。先日エナガのペア(おとすのかたれ) をみつけてしまいました。例年3月半頃になるとエナガは巣づくりをはじめますが、まだ、2月...。うーん..

あんなにかいのは嬉しいけれど、木々がゆ、くりと一雨ごとに芽吹くように、ゆるやかに春が巡って、いくことを願わずにはいられせん。

